

事実を踏まえて「神の国」を論ぜよ！

平成十二年六月、総選挙を前にして森喜朗首相の「神の国」発言が波紋をよんだ。けれども、この喧噪の奇妙なところは、守る側も攻める側も誰一人として日本人の「神国思想」とは何なのかについて正面から論じていなかったことである。ただ、新聞などで伝えられているところから推測すると、「戦前は天皇を神だと考え、神なる天皇が支配するという意味で神の国と言っていた」と双方とも考えていたようだ。攻める側は「そのような考えは怪しからぬ」と言い、守る側は「そのような考えは持っていない」と弁解した。事実、森首相は「天皇と神を結び付ける思いはない」と弁明した。「天皇を神とする思想が神国思想だ」という前提については誰も疑っていないようだった。ところが、神国思想における神は天皇だけではない。まして、神国思想を「天皇のみを神とする思想だ」と考えるならば、その認識は明らかに間違っている。

教育勅語發布当時の神国思想

神国思想には古代以来の長い変遷の歴史があり、その全体をここで述べることはできないし、その必要もないだろう。森首相の発言が教育勅語との関連で問題にされたことを考えれば、ここでまず論すべきは近代の神国思想、それも教育勅語發布当時の神国思想についてであろう。

ところで、教育勅語そのものは神国思想を普及するために起草されたわけではない。その目的は明治憲法の運用にあたって国民に必要とされる道徳を示すことにあった。そのため、特定の哲学や宗教に偏った表現はできるだけ避けるように注意が払われ、国民の思想の自由にも配慮して、法的拘束力のない天皇の「社会的な著作」として發布された。ところが一旦公表されると、起草者の意図を越えて、教育勅語は、明治維新の理想や明治二十年代の社会思潮にしたがって、民間で様々に解釈されることになった。勅語が發布されるやいなや、膨大な数の解説書が出版されたのだが、その一つ一つを丹念に見ていくと、当時、教育勅語が国民にどのように理解されていたのかが見えて来る。

その解説書の中でも特に神国思想的な観点から天皇・国土・国民の関係について説明しているものを次ぎにいくつか抜き出してみよう。

○「皇室は臣民の宗家にして臣民は皇室の支族なる是なり。臣民には皇別神別蕃別の区分ありと雖も神別の古に遡るときは皆皇別ならざるはなく、蕃別の後を顧みれば皆皇別神別の血族と化合せざるなく、畢竟君臣民を挙げて之を一家族と云ふべきものゝ如し」(筒井明俊『勅語私解』明治二十三年刊)

○「我國の地も民も皆神代の神のひらかせ給ひ生み成させ給ふ所なれば地と人民の始めは全く此君恩による事にて人民は皆君の末胤なる事はいふもさらなり。民一人として神の御末にあらざるはなく地一寸として神の御所有地にあらざるはなし」(内藤耻叟^{ちそう}述『勅語俗訓』明治二十三年刊)

○「我が国の君民は、もと同じ一族より出でたるものにして、吾等の先祖を尋ねれば、大かたは、皇族の御家より出でたるものか、又は御祖先の大業を助け奉りし諸神の末ならざるはなし。中にも、朝鮮または支那人の子孫あれど、これ等も皆吾が国の風儀に化せられて、共々に朝廷に対して、忠義一途を旨とし来れり。されば四千万の兄弟姉妹のうち、誰か帝室の臣民にあらざるべき、又誰か忠義の務なきものあらんや」(今泉定介『教育勅語衍義』明治二十四年)

挙げていけば切りがないが、この辺で充分だろう。これらの解説書から見えてくる教育勅語發布当時の神国思想とは、大雑把に言つて次のようなものである。日本とは、神が生みだもつた国土と国民を、天照大神の子孫である天皇が統治する国である。そして、国民は日本の神々の子孫、または日本の国風に共感した帰化人の子孫であり、天皇の使命とは、天照大神が天上の高天原で神々を治めているのと同じ精神で、神々の子孫たる国民を治めることである。

これで、私が最初に「神国思想を「天皇のみを神とする思想だ」と考えるならば、その認識は明らかに

間違っている」と述べた理由の一端が御理解いただけたのではないかと思う。キリスト教的な言い方をすれば、神国思想とは、天皇と国土と国民のいずれをも「神の子孫」と考える三位一体思想であり、国土と国民の神聖さを欠いて成り立つものではないのである。

ついでに言えば、天皇絶対主義の極致であるとして一般には見なされている『国体の本義』（昭和十二年刊）でさえ、天皇を現人神というのは、絶対神とか全知全能とかいう意味ではなく、皇祖神の子孫であり、皇祖神と御一体であるという意味である、とわざわざ断っている。また「天皇は億兆臣民を御一人の臣民とはせられず、皇祖皇宗の臣民の子孫と思召され給ふのである」とか、「我が天皇と臣民との関係は、一つの根源より生まれ、ちようじく肇国以来一体となつて榮えて来たものである」とも述べている。

神国思想に対する誤解の原因

私に言わせれば森首相の「神の国」発言をめぐる騒動の最大の問題点は、非難する側も弁明する側も、本当は神国思想とは何なのかを知らないまま、ただ漠然としたイメージだけで議論をしていることだった。これでは生産的な議論になるはずがない。それではどうして誤ったイメージだけが先行しているのか、との疑問を抱かれる方も多いであろう。答えはこうである。

戦後教育は、昭和二十一年の所謂「人間宣言」との関係で「戦前は天皇を神だと考えていたんですよ。バカですねえ」と教えてきた。ところが、実は占領軍でさえ「神国思想とは天皇のみを神とする思想だ」とは考えていなかった。それは「人間宣言」に先だつて出された「神道指令」をみれば明らかだ。「神道指令」は日本人から奪うべき思想として、神聖な天皇・国土・国民の三つをちゃんと列記している。ただし、占領軍は天皇神聖視の否定を最も重大だと考えたために、特にその部分だけを取り出した「人間宣言」の渙発を強く望んだのである。そして、この詔書だけが戦後教育の中で強調され、国土や国民も神の子孫であるとする考えの存在が全く無視されて来たために、現在のような歪んだイメージを蔓延させることになったのである。

日本流の人権思想の探求

さて、それでは、この神国思想は日本人にとって本当に都合な思想なのだろうか。国民を神聖だと考えることのどこがそんなにいけないのだろうか。国民を神聖視するということは、人種や宗教の如何を問わず「国民」を平等に扱うということにもつながる。最近では、「人権」「人権」と草木もなびくご時世であるが、西洋の人権思想の根底にはゴッドがある。「天賦人権」と呼ばれるように、唯一絶対の神から与えられた権利だからこそ神聖不可侵なのである。神という根拠を欠くならば、人権思想は単に「そう考えておいた方がお互いに都合がいいから」といった程度の御都合主義に墮落する他はない。しかし、キリスト教文化圏に属していない日本人に、西洋の人権思想をそのまま押しつけるわけにはいかない。そんなこと

をすれば、それこそ思想や信仰の自由を侵すことになる。ならば人権思想を日本に根付かせるためにはどうすべきか。日本人が永く持ちつづけてきた神国思想を、日本流の人権思想の根元として再評価する試みがなされてもいいのではなからうか。

しかし、こう言うとすぐに「とんでもない。神国思想などというものは神道だけの思想で、他の宗教には受け入れがたい考えだ。それは神道を国教にせよと言うに等しい暴言だ。だからこそ、森首相の発言が信教の自由や政教分離との関係で批判されているのではないか」との反論が飛んできそう。確かに、今回の騒動の背景には、神国思想を神道だけが唱えてきた特異な思想だとする認識があるようだ。

しかし、この認識は本当に正しいのだろうか。結論から先に言くと、神とは何であり、日本が神国と考えられる理由は何か、という点にまで踏み込めば確かに様々な違いが存在しているものの、「日本は天皇を中心としている神の国である」という考えだけなら、実は、日本史上の多くの宗教家や思想家に広く共有されていたものである。そう言える根拠を次ぎにいくつか挙げてみよう。

中世の神国思想

「神国」の語は公家の日記にしばしば登場するが、その意味を正面から論じた仏教者としては、まず、日蓮があげられる。彼は「神国王御書」という自著の中で日本が神々の守護したまう国であることを語り、

「高橋入道殿御返事」の中で「日本国の王となる人は天照太神の御魂の入りかわらせ給う王也」と述べている。なお、「神国王御書」と「高橋入道殿御返事」は共に、編者・堀田亨（日蓮正宗五十九世法主）、出版願主・戸田城聖（創価学会第二代会長）、発行者・池田大作（創価学会会長）、発行所・創価学会の『日蓮大聖人御書全集』に収められている。

また、親鸞の曾孫の覚如^{かく}、覚如の長男の存覚^{ぞんかく}の時代になると、神祇不拝で有名な浄土真宗にも神国思想が取り入れられた。存覚は『諸神本懐集』の中で「この大日本国は、もとより神国として、靈験いまにあつたり。天照太神の御子孫は、かたじけなくにあるじとなり云々」と記している。その他、禅僧で五山の儒学文学の先駆者でもある虎関師錬も『元亨釈書』の中で神国論を展開している。

近世の神国思想

近世以降「神国」について語っている人物をあげてみれば、朱子学者の林羅山、陽明学者の熊沢蕃山、天文学者の西川如見、浮世草子作者の井原西鶴、浄瑠璃作者の近松門左衛門、心学者の石田梅巖、洋画家の司馬江漢、海防論者の本多利明など切りがない。

たとえば、西川如見は『日本水土考』（二七〇〇年）の中で、「此の国の人、昔、日神の裔たるの謂なり」「此の民は神明の後裔」などと書いている。

とりわけ庶民に絶大な影響を及ぼしたのは近松門左衛門の浄瑠璃だった。職人が天皇を助ける「用明天皇職人鑑」、農民が天皇を助ける「持統天皇歌軍法」は尊皇意識の庶民化をもたらし、大坂町人の八割が見たという「国性爺合戦」は、神国意識や、庶民が自らを天照大神の子孫と考える思想を一般化させたと言われている。

「国性爺合戦」の主人公である鄭成功^{ていせいこう}は、父が明国人、母が日本人で、清に滅ぼされた明を再建するために奮戦した人物である。この浄瑠璃の中には鄭成功が支那で虎と出会う場面がある。その時、鄭成功の母親は「神国に生れて神より受けし身体髪膚。畜類に出会ひ力立てして怪我するな」と励まし、「日本の地ははなるゝとも神は我が身に五十鈴川。太神宮の御祓ひ納受などかなからんや」と言つて、鄭成功に「肌の守り」を渡す。これを受け取った鄭成功がそれを虎に示すと「神国神祕の其の不思議たけりにたける勢いも。忽ち尾をふせ耳をたれ……天照神の威徳ぞ有りがたき」という結末になっている。

近代の神国思想

近代に入ってから神国思想については、すでに、教育勅語発布当時のものを紹介したが、ここでは近代における指導的なキリスト者で、第二代同志社社長を務めた小崎弘道の神国思想を紹介しよう。彼は、すべては神の創造であり思召しであるという立場から、「我国が神国であつて其皇室が天孫であり、

其国体が特別な国体であると云ふ事は決して吾人の信仰と衝突すべき者でない」(『国家と宗教』大正二年)と論じている。

以上の例から明かなように、「天皇を中心に行っている神の国」という考えは日本思想史上において特に珍奇なものではなく、神道家の専売特許でもない。このような事実は、宗教史や思想史を専攻している研究者にとつて、今日では常識に属する事柄である。ところが、このような常識が一般国民には共有されていない。歴史上多くの日本人に共有されてきた考えを口にしただけで国中が大騒ぎになる。これこそまさに、宗教教育がおろそかにされてきた結果なのだろう。

天皇の神格化が戦争を引き起こしたのか？

今回の騒動の背景には、もう一つ、「天皇の神格化が国民を戦争に駆り立てた」という思い込みがあるようだ。ところで、読者は、神なる天皇を狂信して戦争を計画し、それを実行に移したと断言できる人物の名を誰か一人でも具体的にあげ、それを実証的に説明することができるだろうか。私は寡聞にしてそのような人物の名を知らない。ところが、日蓮の教えを信じて、戦争を準備し、遂行した人物なら知っている。満州事変の立役者、石原莞爾である。彼は日蓮の予言を信じて、日米による最終戦争を予想し、それに備えるために満州事変を引き起こした。この石原の思想形成に大きな影響を与えた人物がいる。大正か

ら昭和初期に活躍した日蓮主義的国体論者の田中智学である。そして、この田中智学こそ「八紘一宇」という成語の生みの親だった（『日本書紀』中の神武天皇の詔の言葉は「掩八紘而為宇」）。

こう述べたからといって、なにも私はここで石原や田中に戦争責任を押しつけようとしているわけではない。そうではなくて、歴史を簡単に割り切って考えるのは幼稚かつ危険であり、「天皇の神格化」国家神道「戦争」という図式も又、実証された歴史ではなく、「今のところみんながそう思い込んでいる」という「共同幻想」にすぎないと言いたいのである。

日本の思想史はマスコミが思い込んでいるようなものではないし、日本の近代史も教師が生徒に語り聞かせているようなものではない。実は、誰もはずきりとしたことを知らないのに、あたかもすべてを知っているかのように言い立て、思い込みの上に虚しい議論を繰り返し、正義を振りかざした人物たちが滑稽なパフォーマンスを繰り返す。こんな醜態が国家の中枢部で繰り返される状況から、何時になったら日本は抜け出せるのだろう。